

く。彼れの右手は淫婆神にして左手は觀世音である。

「マホメット」曰く「コーラン」を讀むが我が劍を吞むがど。摩西は劍の如く「エリヤ」は「ゴドラン」の如し。而して基督は「マホメット」の劍を用ゐず。又「コーラン」を假らず。奪命の神符を右臂に約し回生の靈藥を左手に捧げて居る。而して彼れの胸中は唯一の愛火である。門人彼得曾て曰く我等をして三處を建てしめ給へ。一は摩西の爲めにし。一は「エリヤ」の爲めにし。一は主の爲めにせんと。彼得之を言へる時雲あり三人を蔽ひ。基督一人残り。夫れ「アダム」より四千年間。師父預言者皆其特色を以つて現はれ居る。獨り基督に至つては。實に前哲前賢の特色を兼有せしのみならず。惡人妓婦山河草木禽畜魚蟲に至るまでの特色と同情を有して居るのである。

父は打つ母は抱ひて逃げにけり

かはる心と子や思ふらん

彼れの打つは打つにあらすして畢竟撫づるのであつた。唯當時の人之を解し得ざりしは。甚だ憾みとする處である。然れども汝等惡の量を充たせ。汝等の先祖は預言者を殺し。汝等は其の墓を建つと夫れ「ルソー」は十八世紀の破壊者。而かも十九世紀の建設者である。一人一家此の破壊と建設とが伴はねばならぬ。

基督曰く「カイザル」の物を「カイザル」に還し。神の物を神に還すべしと。天地の主「エホバ」の物

を「エホバ」に還し盡さば何物かあつて能く「カイザル」の手に残らん。彼れは國王と臣民との樞樞を挫離して居る。又曰く我れ大平を興ん爲めに世に來らず。媳をして其の姑に乖かしめ。子をして其の父に背かしめ。彼等をして刃を摧さしめんが爲めなりと。俗士は是等の言を聞いて厭ふのである。然れども人の厭ふやうでなければ道とするに足らぬ。彼れは尙甚しきことを言つて居る。人若し其の母其妻子を愛すること我れを愛するに勝らば。我れに善からざる者なりと。宗教家は須らく此の態度がなくてはならぬ。法然上人が後鳥羽上皇二妃。松蟲鈴蟲の歸仰心を占得して。上皇には唯骸躬を抱かせたと云ふので。一般の淨土門に。禍害の及んだことがある。佛蘭西にて「ゼシユウイット」派の盛なりし頃彼等にも斯くの如き感想があつた。蓋し舊教にてはコンフェッションとて。僧侶に向つて罪を懺悔する。一種の秘密告解法ある爲め。或は尙甚しかりし者ありしならん。

基督は父母より其子を奪ひ。國君より其の臣を奪ひ。夫より其の婦を奪ひ。婦より其の夫を奪ひ。全く人倫を認めざるの人。加之彼れは神の殿堂を三日にして毀つと云ひ。我れ神と等しと云ひ。神は凡べての權力を我れに與へしと云ひ。我れは天地未開以前に在つて萬物を造りし「エホバ」なりと云ひ。猶太の王なりと云ひ。我れを信せざる者は地獄の火に投げ入れらるべしと云ひ。其の門人「ベテロ」を記刺して我れ天國の鍵を汝に與ふ。汝之を開く時には。誰れも閉づることを得ず汝之を閉する時には。誰れも開くことを得ずと云ひ。彼れは實に人倫の破壊者なるのみならず。亦天國の破壊者である。

## ◎斷腸の聲

斯くの如くにして彼れは謀反人と呼ばれ。破壊者と嫌はれ。雷に人間に棄られしのみならず。神にも亦見離されて居る。彼れが最後の言を聞け。曰く嗚呼神よ神よ。爾何ぞ我れを棄給ふやと彼れは其の以前に在つても飛鳥は巢あり。野狐は穴あり。我れは枕する處なしと吐ちしことさへあり千苦萬苦は彼れが豫ねての覺悟にして然れども門人もなく朋友もなく。身も亦方に斷末魔の苦しみに際し今は許多の歸依人も。是れ同行者にあらず。遠き暗路を辿りゆく身の。如何に淋しく又痛はしきかは。暗照禪の徒。掠虚頭の漢が到底想像の及ぶ處でない。彼等は畢竟蛇の生殺しにして。全死全生したるものではない。曾て宗演和尚が湯島の麟祥院に於いて。何にかの提唱の時開講の偈に示されたことがあつた。

孟賁失<sub>レ</sub>勇<sub>ヲ</sub>鳥獲<sub>レ</sub>泣<sub>ク</sub>。雞鳴狗盜奈<sub>ニ</sub>斯<sub>ノ</sub>關<sub>一</sub>。

又谷中の全生庵に於いて。虎溪の海晏和尚も其頃。不<sub>ニ</sub>全死<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>全生<sub>一</sub>。と全じ様なる意を開講の偈に掲げられた此節でも一方の作家と呼ばるゝ人は皆。此の境を實踐して居らるのである。明覺大師。雪竇顯和尚に

二十年來曾<sub>テ</sub>苦<sub>ク</sub>辛<sub>ク</sub>。

爲<sub>レ</sub>君<sub>ニ</sub>幾<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>蒼<sub>ニ</sub>就<sub>ニ</sub>窟<sub>一</sub>。

屈<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>述<sub>ス</sub>。

明<sub>レ</sub>眼<sub>レ</sub>衲<sub>レ</sub>僧<sub>レ</sub>句<sub>ニ</sub>輕<sub>ニ</sub>忽<sub>一</sub>。

と云ふ句がある。一重山盡き山又山。彌々海雲山月の情を語り盡す時に至るまでには。幾處の難關は。眞に蒼龍窟に下るの思ひがする。我が十字架教にても「ノア」の方舟あり。摩西の紅海あり。其の外河を涉り溪を潜る處一々皆當年「ゴルゴタ」刑場の若しみを表して居る。若し夫れ「ダビデ」の詩篇を執つて。之を緋かば人知れず。彼れが如何ばかりの苦惱を窮めしか。試みに其の一二句を掲げて。讀者に示さん。

我已<sub>ニ</sub>陷<sub>ニ</sub>深水<sub>一</sub>之泥<sub>ニ</sub>溷<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>之所<sub>一</sub>。我已<sub>ニ</sub>入<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>深淵<sub>一</sub>。洪水<sub>ニ</sub>瀾<sub>ニ</sub>漫<sub>一</sub>。

於<sub>ニ</sub>我<sub>一</sub>兮。我呼<sub>レ</sub>籲<sub>レ</sub>已<sub>ニ</sub>倦<sub>ニ</sub>我<sub>レ</sub>喉<sub>一</sub>已<sub>ニ</sub>乾<sub>ニ</sub>兮。我目<sub>ニ</sub>已<sub>ニ</sub>瘁<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>望<sub>ニ</sub>我<sub>レ</sub>神<sub>一</sub>。

此の哭聲に向つて。眞に同情を寄せ得る者は。亦曾て自ら哭聲を發した人である。佛果園悟禪師は雪竇の所謂。屈と云ふ一字句の下に。著語して曰く。愁人莫<sub>レ</sub>向<sub>ニ</sub>愁人<sub>一</sub>説<sub>ト</sub>。又堪<sub>レ</sub>述<sub>ス</sub>と云ふ二字句の下に説<sub>ニ</sub>向<sub>ニ</sub>愁人<sub>一</sub>愁<sub>ニ</sub>殺人<sub>一</sub>と語を下して居る。

## ◎二河白遣

若し夫れ鏝湯爐炭も吹いて滅せしめ。劍樹刀山喝して便ち摧くの英靈漢あるも。其は決して最初より然るにあらず。必らず一度は血涙をも流し。斷腸の聲をも發したるものである善導大師は支那にて淨土門を大成したる人。其の著安樂集に左の如き譬喩談がある。此の類の話は色々あれども。皆波斯

より傳はりたるものである。而して其の源を尋ねれば。或は摩西の紅海より出たる者ぞ。考へらるゝ點もあれば。暫らく之を擲出せん。

人あり西方に向つて往き去らんと欲するに。道程百千里。忽然として中路に二河あるを見る。一は火の河にして南を流れ。一は水の河にして北を流れて居る。水火の中間に正さしく一の白道あり。幅纔かに四五寸ばかりである。此の白道東岸より西岸に達す。其の水の波浪交、過ぎて道を浸たす。其の火の燼燄亦來つて道を焼く。水火相交つて常に息むことなし。此の人既に空曠の廻かるる所に至つて。人影竭き更に群賊惡獸あつて。此の人の單獨なるを見。競ひ來つて此の人を殺さんと欲して居る。此の人害を怖れ直ちに走つて西に向へば。忽然として此の兩大河に遭著す。乃ち自ら念言すらく。此の兩河は南北共に邊畔を見ず。深きことも亦恐らく底なからむ。中間に一の白道を認むるも。極めて狭小なれば。何に由つてか彼岸に達すべき。今日我れ必定して死せんこと亦疑ひなし。正しく到り回らんと欲すれば。群賊惡獸漸く來り逼る南北に避け去らんと欲すれば。惡獸毒蛇競ひ來つて我れに向ふ正しく西に向つて道を尋ね去らんと欲すれば。復た恐らくば此の水火の二河に墮せんことをぞ。其の時の惶怖復た言ふべからず。乃ち自ら思念すらく。我れ今廻るも亦死せん。住まるも亦死せん。左右亦遁るゝに途なし。畢竟して死を免るゝの術なくば。我れ寧ろ此の白道を尋ねて。驀直に前向して進み行かん。既に此の白道あるからには。必らず應さに度脱するの道あるべしと。是の念をなす時。東の岸より

り忽ち人の勸むる聲あり。汝但だ決定して其道を尋ねて往け。必らず死の難なけん。若し住まらば即ち死せんぞ。又西の岸頭に人あり喚んで曰ふ。汝一心正念にして直ちに來れ。我れ能く汝を護せん。凡べて水火の難に墮することを畏れざれど。此の人既に此處に遣はし彼處に喚ばはるを聞いて。乃ち自ら身心決定して。道を尋ねて直進疑はず。亦更に退心を生せず。或は行くこと一分二分する時。東岸の群賊齊しく喚んで曰ふ。汝回り來れ其の道甚だ險惡なれば。必らず過ぐることを得ずして死せんこと疑ひなし我等惡心を以つて汝に向はざるべしと。此の人彼等の聲を聞くと雖も亦回顧せず。一心直ちに進んで。狭小の白道を踏んで往きければ。須臾にして便ち西岸に到達し。永く諸難を離れ。善友相見て慶樂已むことなしと。

讀み來つて。摩西が紅海を涉る時と能く似て居る。唯足らぬ處は。其の人白道を渡ると同時に。群賊惡獸齊しく滅せざるの一事である。加之彼れには。直ちに水火に身を投じ。又は潜り去るの意が含まれて居る。其の外端的の處を缺ぎ稍徹根せざるの嫌ひなきにあらざれども。是れは畢竟淨土門なるが故である。

## バベルの塔(中)終

## 「バベル」の塔 (下)

### ◎四十日 四十夜

水火の間を過ぐるは唯一瞬時にして。之を反掌の間と云ひ一秒時と云ひ。甚だしきは電光石火の如しと云ふて居る。而して其の回数は何。禪家の祖師達が其の多きは大悟二十遍小悟數知れずと稱し其の少きは大悟六遍小悟數知れずと稱するあるを見れば佛教には大悟の回数が頗る多い。或は増上慢の徒を警むるが爲に。斯くは爲人の言をなすものなるやも知れず。遮莫我十字架教にては其の大悟と稱すべきもの恐らく四回より多くはない。即ち「バベル」の塔剝盡して「アブラハム」を出せる一。埃及の「エセン」の地決壊して摩西を出せる二。土師時代の老驢困斃して「ダビデ」を出せる三。「エルサレム」の凝血換散して復活の基督を出せる四。乃ち「アブラム」に及んで始めて。人は「パン」のみにて活る者にあらざるを究め神の言を信せざるものと伍を同ふせず摩西に及で。更に「エホバ」の試みる可からざるを見強頸の民を誅し。「ダビデ」に及で此に前者を併せ。富貴の濫りに希ふべからず。榮華の長へに保つべからず。唯「エホバ」の前に赤裸小兒の如くなるべきを證し。基督に至て始めて圓滿具足し身は元中央本尊なるを認め天地の事物、有無、善惡、生死、悉く是れ天使にして。已れに役事する

るのなることを了會し其の間實に四千年程を経て居るのである。此の四千年程は即ち。先きに所謂白道の經行時間にして。「アダム」失落より基督の昇天まで一運歩の瞬間である。而して此外に亦數知れぬ小悟の場所が澤山ある。

夫れ「アブラハム」の前には方舟あり。摩西の前には紅海あり。「ダビデ」の前には誅求あり。基督の前には十字架あり。一步は一步より難く。後箭は前箭より重く。終に基督に及んで絶對絶命。唯最後の一聲何れの處にか落在す。四流「エデン」を潤し。草木繁茂。碧玉珍珠「ピソン」より出づ。是れ基督の面目にあらすや。預言者以賽亞が。諸谷將さに擧り起らんとす。諸山諸嶺將さに夷らげられんとす。屈曲將さに直うせられんとす。崎嶇將さに平らげられんとすと云ひしは正しく此の時を預言したものである。又曰く當時豺狼將さに羔と同じく居らんとす。豹は將さに山羊羔と同じく臥せんとす。犢と小獅と將さに同じく伏せんとす。童子之を導くべし。牛と熊と同じく食らひ。其の小子共に伏し。獅は將さに牛の如く草を嚼まんすとす。乳を哺するの嬰將さに毒蛇の穴に戯れんとす。乳を斷つ兒將さに其の手を蝮窟に置かんすとす。聖山の偏處に在つて。必らず傷める所なく。害する所なからん「エホバ」の智識は地に充盈して。水の海に掩蓋するが如く異なるなかと。故南隱老師。曾て這問の消息を傳へて曰く。

王寶劍豈投死屍

活斬魔佛血淋漓

如今拋擲雲峰頂

脚下腥風一任吹

又故山縣玄淨師が。其の阿字觀に因つて。得られたる處を示されたことがある。是れは元遠江の青頭巾と云ふ和尚の古事を詠せられた者であつた。少し宗癖はあれども。それなく。面白い處が見ゆる。

法爾身軀江是血

本來面目月如眉

枯體今作松風洞

罪福無痕任一吹

基督葬られし後。かねて歸依の信者達。其の墓に詣で見ると。墓は開けて其の中に死骸なかりければ。側らに立てる人に問ふ。其人曰く愚かなる者共よ。汝等の尋ぬる彼れは。遠く蘇りて汝等の中に在りと。若し夫れ禪宗の人なれば。斯くの如き處に格別の興味を持つて居るのである。雪竈の偈に。

江國春風吹不起

鷓鴣啼在深花裡

三級浪高魚化龍

痴人猶辱夜塘水

然れども禪宗の人とて。最初より此に至られるものではない。必らず階子段の順序がある。珍重大元、三尺劍電光影裏斬春風などの句は。凡べて十字架を經過したる人の口より發したものである。一度復活したるものは。其後如何なることあつて襲ひ來るも。針鋒頭上打筋斗の轉身を得。赤脚上刀山。竿頭更進一步の覺悟も常にありて。造次顛沛の間にも油断はなく。而かもそれが自然となつて居る。但し人々因縁に由つては。頓悟頓證する者あり。漸悟漸證する者あり。或は頓悟漸修漸修頓悟。元より

様々なれども。要するに大疑の下に大信。大苦難の後に大安樂は。普通免れざる處である。若し夫れ一足飛びに。

アラ樂や虚空を家と棲みなして

須彌を枕に獨寢の夢

と大法螺を吹く者あらば。勿論其は入塵垂手の受用なく。十方遍照の功德を缺ける人である。粗嚼は飢へ安く細嚼は飢へ難し。修行は須らく綿密でなくてはならぬ。淨土門にも三願轉入と云ふことあり。唯安心しと云うて。其の説く處一念にもせ多念にもせよ。眞の安心なるものが。其の様に容易く得られるものではない。能登の總持寺の開山瑩山和尚は。最初淨土門を修した人であつた。後禪宗に歸して。従前の不得要領を顧み。淨土門は易行道にあらずして。寧ろ難行道であると曰はれたことがある。余より之を見れば。決して不得要領ではない。唯説き様の悪いのである。試みに淨土三部經の中の大無量壽經を繙いて見よ。最初十億の佛がある一々皆佛國土をなして居る而して何れの佛國土に往生するにも六種の波羅密とて非常に六かしき修行を。六つ程満足せねばならぬ。之を六度滿行と云ふのである。其れも後佛は前佛より次第に難行道となり行くので。到底凡夫の根機に適ふたものでない。加之時間を要することが一種の波羅密にても何十小劫と云ふのである。故に彌々一佛土に往生するまでには逆も吾人の頭腦を以つて。想像も出來ぬ程の長年月を費さねばならぬ。其れを法藏

比丘と云ふ。菩薩があつて。如何にもして別に易行道を立て。愚痴劣根の尼女房に至るまでも。齊しく佛國土に往生させたいと心願を起して久しく思案を凝らした後終に世自在王と云へる佛の許に詣り之を相談せしに世自在王佛は法藏比丘に一の三昧法を授けた。此の三昧法と云へるは即ち前に出し、善導大師の譬喩談にもある。水火兩河の間にある狭き白道を通過するの端的にして。之より遣す聲あり。彼れより喚ぶ聲あり。畢竟他力より他力に移り必然より必然に轉する一瞬時の經過である。

斯くて法藏比丘は彼岸に國土を建立して。之を極樂淨土と名けた。是れが即ち阿彌陀佛である。最初已れも諸佛諸菩薩と等しく六波羅密を修行したる身なれども。頓世自在王佛の三昧法を聞きたる後は。其の難易單雜同日の論にあらず。已れ他を攝するにも。亦須らく斯の法に由るべしとて。更に四十八の關門を國土の周圍に設け。其の何れよりもするも隨意なることながら。之を通過するに自ら難易あり。十九、廿、十八の三門は。特別に之を入り易くして居る。中に就いて第十八は。無智蒙昧の小兒婦女子の爲めに。其の扉は常に開かれ。別に關稅を要せず。唯南無阿彌陀佛と云ふ。關券を持するのみにて。他の誰何を受けず。自在に出入を許すのである。而して其の關券は如何にして之を得るかと云ふに。國王自ら行脚し。或は其の臣下を四方に派遣して。逢ふ者には皆無代價にて之を施與するのである。若し受けざる者あれば之を五逆罪と見做して。何れの門より入ることも永遠禁じて仕舞ふ元來慈悲深き佛なれば。種々に手廻しをして。是非受けねばならぬやうに。仕向くる。之を彌陀の方

便と云ふのである。

七〇

却説斯くの如く法藏比丘の心願成就して。罪障をも言はず修行をも要せず。十方の衆生を悉く自國土に招入するには。何の造作もなく。至易至簡のやうなれども。頑瞑不靈の凡夫は。却々佛の慈悲を解せず。寧ろ冤敵のやうな感を抱くのである。去れば佛は種々に方便を廻らして。已れに廻向せしむる許多の手段の中に。最も其の妙を得たるものは。極樂の相と地獄の相とを對照して。更に娑婆世界の無常を觀せしむるのである。此の無常觀は元來中央亞細亞の特産物にして。先づ波斯に輸入し波斯より更に印度支那に轉じ支那より日本に來りたりし頃には。恰も好し階級制度漸く其の基を掘ぬし時代にして上下共に其の無變化の熱腦を冷やすには。好箇の清涼水であつた。更に平安朝の末に及んで四民亂離の餘大に淨土門が歡迎せられ。降つて徳川時代に及び。更に其の盛運を來たしたる所以は他なし。愚は愚に安んせしめ。貧は貧に止らしめ。世の不平家をして。其の野心を逞うせしめざる爲には。或者をば之を極樂淨土に向はしめ。或者をば之を坐禪觀法に轉せしめ。福神同士相集つて彼等の百守中に豆を拾わんとするのであつた。然れども我が日本人は本來無常觀の種族にあらず。又他土の禍福を心に繋ぐる者にもあらず。極めて樂天觀の現世主義にして。今日の如く自由の世となり。剩さへ學術の進歩日に月に。其の速度を増すに至つては。阿彌陀様も自ら其の方便を改めねばならぬ。之を如何に改むるを可とするかと云ふに。經典の曲解は固より容すべからず。寧ろ從前の邪解を改

めて。之を正解に向はしめねばならぬ。法藏比丘が西方に極樂淨土を建立せし時には。已に他の十億の佛國土を打して一圓となしたるものにして。之を馬鳴は一佛敎に説き龍樹は多佛統一敎に説いて居る。其の何れに因るも親鸞の不來迎説は此土入證と異なることなく。四方立相は對機の方便に外ならず。然らざれば愚禿の是心是佛も唯心造も皆壞れ去らねばならぬ。更に夫の大切なる平生業成の立場を失ふ。道理である。又法藏比丘は人々箇々具足の法藏にして。之を心外に求めてはならぬ。其の四十八願は是れ曼荼羅である。世自在王佛は彼れに向つて三昧法を別段に説かざりし。隨に其の中に三昧法がある。彼れは此の三昧法に由つて。成佛するには。無論放手捨命其の間に大死一番で居る。其の時間は縱令一刹那なるにもせよ。其の間に前一十億の佛國土を悉く通過して。一々之に供養し又其の説法をも聽いて居る。是れが即ち三昧法の功德である。善財童子が德雲比丘の三昧法を得て。十信十行、十住、十回向、十地、の五十階段を一刹那の間に通過して居るのを。法然上人も其の撰擇集の中に三昧法より外に往生の道なしと説かれしにあらずや。斯くの如く説き來つて。更に往相還相是れ一廻向兩相となし。正定聚と滅度は。修行の程度に従つて。二役ともなし一役ともせねばならぬ。六要抄等に因つて濫りに定磐星を認むるは宜しくない。

之を要するに。其の見性派なるにもせよ。他土往生派なるにもせよ。夫の三昧は免れざる所である之を淨土門にて一般に前念命終。後念即生と稱するにあらずや。元來佛敎には靈魂説はないのである

釋迦も龍樹も曾て言はぬことを。濫りに説き示すは滂法罪である。前念命終後念即生は。變易生死の上にて云へるものにして。肉身は娑婆に留まり靈魂は極樂に飛ぶと云ふ意味ではない。

基督曰く 等死して甦るにあらざれば。天國に入ること能はず。佛教の淨土門も亦然り。生死の關を透らざれば。決して極樂に入ること能はず。南無阿彌陀佛の六字稱名は縱令其の初め無代價にて之を施與せらるゝにもせよ。扱其の易行道たること。佛國の樂しきこと。自己の罪あること。彌陀の慈悲深きこと等。先づ之を信するのが困難である。報恩謝徳も六時禮讚も畢竟人眞似である。好し之を信じても彌々我が者とするまでには。復た容易でない。無常の鞭を以て撻たるゝか。優勝劣敗の筈にかゝるか。不平不愉快の刑具を擔ふか。良心呵責の鬼と戦ふか。來世の災殃を怖るゝか。是等何れを以つて信仰の縁とするも。一旦絶命の淵に身を投せざれば。後念即生の淨土を見ること能はず。先きの二河白道は即ち。無常鬼に追はれて。左右後方避くるに道なく。退くも死せん進むも亦死せん。死は一なり寧ろ進んで一生を賭せんと。決定せし處に忽ち前後より招換と差遣の聲あるを認めたり。此聲即ち南無阿彌陀に外ならずとすれば。愈益之を得るの難きを思はねばならぬ。若し夫れ優勝劣敗。良心呵責の鬼に掠められて。空中より直ちに水火の中に向つて。投擲せられたる時は如何。我が十字架教にては。斯くの如き場合に寧ろ。大死大活の道理がある。淨土門にも若し之れありとすれば。南無阿彌陀佛を得るの容易ならざること更に之を思へ。

善導の所謂白道は。我が十字架教にては「ノア」の方舟雅の客「ヤボク」。摩西の紅海。「ダビデ」の諸苦難。基督の十字架等である。而して基督の十字架は。善財童子が一刹那に五十階級を過ぎしが如く法藏比丘が一瞬間に十億の佛に見えしが如く。嗚呼神よの聲と共に。直ちに「エデン」樂苑、否天地未開以前に溯つて師父預言者、善人惡人、乃至禽獸草木の情までをも。通過徹洞して居るのである。

### ◎殿 幕

夫れ摩西が神の幕屋を造る時其の器具を圓輪法にしたるものあり。或は極と極とを環連せしめたるものあり。柱梁桁板。祭壇約櫃其の他の裝飾等其の構造配置凡べて之を人身の機關に擬したるものである。又た所と至聖所とを區別して。聖所は民の禮拜する所。至聖所は神の座即ち約櫃を案置する所である。此の間に一の幔幕あり。上より下に垂れて。民は至聖所を覗くこと能はず。唯祭司長一人が牲血を奉じて。年に一回出入するのみである。此の幔幕果して何物なるや。若し之を知らば我が十卷書に通曉したるものと稱せらるゝを得ん。

幔幕は即ち靈肉を隔つるものにして。十字架の目的は唯他なし。中間の幕を截ち去つて靈肉一體ならしむるの秘訣である。已に靈肉一體となれば方々に神人不二なることをも亦證得することが出来る。



基督は靈肉死して靈肉蘇りたるもの。彼れ保羅教徒の謂へるが如く。靈魂と肉體と別なるものにあらず。又基督には人性と神性とを兼ね居るご云ふべきものではない。本來神人不二である。何人にても自己胸中の殿幕一旦破れ去れば。直ちに余が言を怪まざるに至らん。

又此殿幕は戒律である。神が「アダム」に命じて。汝善惡を別つの樹葉は。之を食ふなかれと曰ひ給ひし時。方さに朦朧として。「アダム」の眼中に翳障をなして居つたのである。「アダム」既に善惡樹を食らひし後は。全く神と人とは隔てられ。靈と肉とは相別れ去つて。生死あり、彼我あり、好惡なり萬般の差別と共に智見叢生す。蓋し吉凶あれば必らず禍福あり。禍福あれば必らず之を揀擇す。揀擇すれば茲に智慧生ずるは自然の事にして。佛教及び易等にて云へる所と毫も異なるなし。其の眼開けたりと云へるも亦之に同じく。「アダム」は善惡を別つの樹を見て。終に生命樹を失へり。

夫れ戒律は「ノア」及び摩西に因つて傳へられたるも。管に此れのみ止まるにあらず。風雨雷電皆戒律なり。草木禽獸皆戒律なり。天地萬物皆戒律ならざるなし。疾病となり文字となつて人間を翻弄するもの何れか是れ戒律にあらざる。吾人の戀愛希望。有形無形内外に遍在するもの。皆吾人を翻弄して。霎時の間も休息せしむることなし。是れ果して何物なるか。諸人之を判せよ。

又戒律は天地を造れり。「エデン」を造れり「アダム」を造れり。生命樹を造れり。善惡を別つの樹を造れり「ノア」を出せり。「アブラハム」を出せり。摩西「エリヤ」「サウル」「ダビデ」乃至基督を出せる。

飛行の天使を造りしものも戒律である。地行の蛇を造りしもの亦戒律である。凡べてのもの戒律に因つて造られざるなし。

去れば戒律なるものは天地を造り。又天地を毀つものである。吾人の目前には此の戒律の幔幕が横つて居る。吾人の目を遮ざるものも戒律なれば吾人の目を開くものも亦戒律でなくてはならぬ。吾人は戒律に因つて支配され。戒律に因つて翻弄せられ。又戒律に因つて生活して居る。戒律は惡むべく亦愛すべきものである。夫れ世人に愛せらるること基督の如き者ありや。然れども世人に惡まるゝことも亦彼れより甚しきはない。神會て亞拉比亞の野に於いて其の狀莖麥子の如くにして透明。其の味は蜜に和するの遍餅の如きものを降らせり。民衆見て「マナ」と云へり。「マナ」とは是れ何ふと云ふ義である。吾人も亦基督の如きもの。戒律の如きもの。及び幔幕の如きものを見て。毎に是れ何どの聲を禁ずる能はぬものである。

蓋し以色列人は。埃及を出でし。迦南の新穀を食するまで。凡そ四十年間。此の「マナ」を食せしむるのである。抑も最初此の「マナ」を降らす時には。毎つも薄暮に。鶉來つて營を覆ひ。味爽「マナ」地に布けり。蓋し「マナ」ミ鶴鴉とは元別物にあらざるを表して居る。以色列人會て「シナイ」山の麓に在つて「エホバ」に願て曰く願くば再び我等をして爾の聲を聞かしむるなかれ。我等をして再び此の烈火を見せしむるなかれ。庶幾くは死亡を免れんと。其の時「エホバ」摩西に謂つて曰く。彼等の言へる所

善し。我れ將さに其の兄弟の中に於いて。一の預言者汝と相等しきものを立んとす我れ將さに我が言を其の口に置かん。彼れ將さに我が命する所を以つて衆に諭さんとすと。夫れ以色列人が金櫃を鑄て之に獻祭せし時。摩西之を見て怒り。兩手に在る證詞の碑を擲ちて之を碎きたり。蓋し神は悉く其民を殲滅せんと曰ひしも。摩西が己れの身を碎きて。飲まず食らはず四十日四十夜の間。山に上りて「エホバ」の前に拜伏しければ「エホバ」は再び證詞の二碑を摩西に與へ給へり。摩西之を携へ下る時。其の面皮輝きて。光ありければ民畏れて見ることも能はず。摩西之を以つて其の面を蔽へり。斯くの如く摩西は其面を蔽ひ基督は其面を顯はす。基督の血を飲んで活きし者は。亦曾て摩西の肉を食らうて活きし者である。

以色列初代の王「サウル」は壯にして且つ美。肩より以上民衆より高く誰れも彼れ之美と競ふものなし。「サムエル」之に齊して。立て、以色列の王となせしも。後之を悔いて。更に「ダビデ」を立てたり。「ダビデ」は牧童にして。其の面赤く身長常人より卑く。誠に野生の一少年であつた。神「サムエル」に諭して曰く汝貌を以つて觀るべからず。心を以つて之を見よと。基督は一賤工一卑女の間に出で。僻村「ナザレ」に育ちし人である。或時大勢彼れを取り圍んで。其の道を説けることを聴き居たり。當時の學者智者之を見て。彼の集れる人衆は何事なりやと問ふ。傍人答へて彼れは預言者「ナザレ」の耶蘇とて近頃世に出て、衆人の人に欣仰せられ。到る處彼れを要して其の道を聴くなりと曰ひければ。箇

は面白し一番問答しやらんとて。人衆を押し分け入り見るに。粗野貧窶の一人。其の狂氣めきたる説法に呆れ驚きて出で去りけり。其の中の一人残りて。彼れに向つて曰く。神は形貌を以て人を採らず我れは豫ねて爾がなせる多くの奇蹟を聞く者。蓋し神と偕ならざるものが。斯くの如きの事を。爲し得らるべき道理なし。我れ今爾に尋ぬる事ありきて。一の間を發せしに。忽ち魂を褫はれたり。「ヘロデ」王曾て「パンテスマ」の「ヨハネ」を殺し。中心惴れ息まず。耶蘇なるものが多くの奇蹟を行ひ。且つ「ヨハネ」の復生なりと聞いて。久しく之を見んことを。求め居たる折しも。彼れ捕へられて。己れの訟院に廻はされ來りければ。「ヘロデ」王忽ち之を藐視せり。

奈翁曾て曰ひしことあり。我れ泥中より我が將卒を造り出せりと。神は毎に爛泥裡に「ダビデ」基督等を起こして居る。佛蘭西の婦女は謳ひし。「ブルボン」家は貴族の王。「ナポレオン」は民の王と。基督「ダビデ」は乃し賤婦に悦ばれたる者である。或時民衆「サウル」を尋ぬれども見えず。之を「エホバ」に問ひければ。「エホバ」曰く彼れは器具の間に匿くれたりと。民衆果して彼れを。器具の中に尋ね得て。携へ持ち來り。擁立して王となせり。「ダビデ」は是れ器中の人にあらず。彼れの布袍鑿石は。能く「ゴリアデ」を殛し。彼れの裸體は能く神の櫃を遷し。誓言を履んで其の子「ヨナタン」を殺さんとしたる「サウル」は彼れが。其の匪胤孩兒の爲めに食を廢して慟哭せしが如きものにあす。彼れは己れの軍師「ヨアブ」兄弟を手餘したる程の弱情であつた。然れども彼れの過ちを見て。此に其の仁を知ら

ねばならぬ。曾つて「シメイ」と云者より面前に誼はれ罵られ又石を投げ付けられた事があつた。基督が其の門人に反かれたるを見て。攻究を要する點が澤山ある。「ノア」「サウル」は身の裸體なるを耻ぢたる「アダム」にして。若し彼等の體を裸露すれば直ちに誼はれねばならぬ。唯十字架上の基督神前の「ダビデ」のみあつて。能く吾人を祝して居る。

然れども但其れ。摩西「アロン」の一體なるを知り。基督「ノア」の別人ならざるを解し、「サウル」「ダビデ」も亦本來の仇にあらざるを了せば。「マナ」と鶴鴉の元不二なるを體得するに餘あらん。朝たに「マナ」なるものはれ夕に鶴鴉となるにあらずや。昨夜の鶴鴉明日の「マナ」たるを知らば。我等は意を強ふして鶴鴉の營を獲ひ來るを俟つべきである。民衆野に在つて「モーセ」「アロン」を怨謗せしかば「エホバ」の火民の中に焚へて。營の極處にある人々を燬けり。更に難處するものゝ中に慾を懐ける者あり。或者は亦哭して曰く。誰れか肉食を以つて。我等に與ふるやと。蓋し民衆毎朝起きて野を巡行し「マナ」を飲めて之を食せり。夫れ「マナ」は磨するに糞を以てし。或は搗くに臼を以つてし。釜にて炊き餅となせば。其の味油餅の如し。彼等は久しく之を食らひて。今は其の枯淡に厭き果てたりければ。更に他の物を求めたり。茲に「エホバ」長老七十人を立て。之に靈を賦して。摩西と共に。民を宰らしめ。又民衆に告げて曰く汝等宜しく自ら已れを聖別すべし。明日を待つて汝等必ず肉食を得ん。其れは一日にあらず。二日にあらず。五日にあらず。十日にあらず。亦二十日にあらず。乃ち期月に至つ

て汝等の鼻に溢るゝを待てと是れ何の。意なるや其の自ら聖別すべしと云ひ。肉食鼻に溢るゝを得んと云へるもの。所謂彼の摩西と相如くの預言者なるか。將た迦南の新穀なるか。然れども「マナ」の時代には。須らく是れ「マナ」を以つて常食とせざるべからず。

「ノア」の時に在つては葡萄酒を飲むべからず。「ダビデ」の時に在つては其の舞蹈を嗤ふべからず。天上に及び盡さざれば地下を潜ぐる能はず。地下を潜ぐり盡さざれば。迦南の乳蜜を食らふこと能はず。迦南の乳蜜を食らひ盡さざれば「ダビデ」王の裸體を見ること能はず。「ダビデ」王の裸體を見盡さざれば。「ソロモン」の智慧を見ること能はず。「ソロモン」の智慧を見盡さざれば。基督を見ること能はず。基督を見盡さざれば。天地を創造すること能はず。天地を創造せざれば。生命樹果を食ふこと能はず。生命樹果は即ち「マナ」である。密部佛教にては之を月輪觀として居る。

蓋し金剛界にては月輪觀を透得して。始めて八葉の蓮華を出し。胎藏界にては八葉の蓮華を觀じ盡して。始めて一輪の月を打出するの順序である。今「マナ」を月輪觀に比し鶴鴉を八葉の蓮華とすれば「マナ」を食らひ盡して始めて。鶴鴉來るの道理である。但し佛教にては廣觀略觀と云ふことあり。心寂靜時住「略觀」散亂時住「廣觀」とあつて。月を觀じ蓮華を觀じ共通性阿字を觀じ。或は阿逆月次第してと觀じ。斯くの如く同時に觀じ別々に觀じ順逆順と二様に觀する等の事がある。夫れ基督「ダビデ」等は蓮華にして「鶴鴉」である「ノア」「摩西」等は。月輪にして「マナ」である。「マナ」には鶴鴉あり。鶴鴉に

は「マナ」あり。相表裡して。元別物にあらざるも。亞拉比亞の野に在つて。「マナ」を以つて。時處相當の糧食とせねばならぬ。

佛教にて四悉檀と云ふことがある。一に曰く世界。即ち觀音の三十三身等である。二に曰く爲人。即ち應病の意にて人の爲めにするものである。三に曰く對治。即ち與樂の意である。四に曰く第一義。即ち涅槃の妙義を覺らしむるのである。蓋し悉檀とは布施の謂ひにして。說法する時には對機に相應して此の四悉檀を自由に用うるを云ふことになつて居る。今亞拉比亞の野に在つては。「アロン」は裏にして鶴鷄。摩西は表にして。「マナ」當時對機相應の良藥である。良藥從來口に苦し。彼等が摩西に向つて咄く。亦無理ならざるを見る。

海風あり「エホバ」より來つて。鶴鷄大に至る。皆營の地に附して墮ち。此の旁ら約一日程。彼の旁ら約一日程。營の四周に偏く。高く地面を出る約二尺。民起つて之を拾ふこと終日終夜。以つて己れの利用となし。之を食うふに肉猶齒に在つて。未だ全く噛み碎かざるに。「エホバ」の怒り烈しく。急に其の民を攻め。降すに大災を以つてせり。當時猶未だ肉食の時節至らざるを證して居る。

會て疫癘起つて大に民を苦めしことあり。「アロン」起つて摩西の幕屋に入り來れば。即ち疫癘息む。基督曰く我れ父に歸せば。汝等に慰安師即ち聖靈を贈らんと。今「マナ」と鶴鷄と歸一せし處。即ち吾人の安息日である。去れど六日の間は必らず操作せねば。此の六日間は即ち所謂漫幕である。

### ◎六日の操作

余は前章に於て。幔幕は戒律にして。神、惡魔是れ戒律。是れ幔幕なることを言へり。吾人若し自己即戒律。自己即幔幕。自己即神自己即惡魔。乃至自己即宇宙なることを知らば。六月の操作は即ち是れ一日の安息日なるを會得せん。然れども一度死せざれば此の幔幕が破れぬのである。基督が十字架上にて絶息する同時に殿堂の聖幕上より下に裂けたりとあるのは即ち是れである。

禪宗の公案と云ふものは。大抵皆此の端的を承當させたものである。例へば誰れも善く聞き傳へ居る趙州の無字などが即ち其れである。僧趙州に問ふ。狗子佛性ありや否やと。州曰く無。僧曰く涅槃經に悉有佛性と説いてある。什麼としてか却て是れ無なる。州曰く彼れに業識あるが爲めなりと。業識とは罪障のことである。此の身は即ち罪障の疑團にして即ち善惡樹である。善惡樹は即ち六日の操作にして。生命樹即ち安息日と一體不二なるものである。趙州の所謂業識即佛性なる意も。是れにて解ける神は六日にして天地を造つて居る。初めの第一日は極めて單純。佛教にて所謂平等の極である。終りの第六日は極めて複雑。佛教にて所謂差別の極である。佛教に地水火風空識と六つに別けて居る。空は平等識は差別。中間の四大のみが常に働いて。四大即空。四大即識と云ふ道理がある。夫れ周易みにても同じく。此の組織が見ゆる。例へば乾☰の卦にて。上下の二爻は位がない。中間の四爻

のみが常に變化をなして居る。今より六七年前「ペンシルワニヤ」大學にて亞米利加土人の遊戯物を。研究して出したことがあつた。其の中に此の易が出て、居る。而して彼等の研究に由れば。言語學上よりするも形體學上よりするも。決して支那傳來のものではなくて。中央亞細亞或は波斯の産なることを證明して居る。扱米國土人は之を何に用うるか云ふに。吉凶禍福の判斷。事物の算用乃至遊戯具に使用して居る。研究者曰く最初は蓋し之れにて學術倫理をも鑽攻せしものならん。又別に大極圖がある。四方に四神あり。拆伏的の者と攝取的の者と上下相對し。中間性の者が左右相對して居る。又各隅角に四天王の如き者がある。全く佛教の曼荼羅圖である。彼等は之を皿面に書き或は壁畫にして居る。研究者は其の何の用たるを明らかにせざるやうなれども吾人は一見して之を解すること出来る。扱又彼等の算木も一畫の者と中畫の者と陰陽の二種あつて。其の形全く支那と同一である。唯組合せが四爻と三爻になつて居る。即ち西部亞細亞の古代思想が彷彿として吾人の胸中に泛び來るのである。

夫れ六日の創造の中。之を中分すれば單復の二となる。之れに共通性を副ふれば即ち三となる。是れ即ち神の三位生命善惡の無別。神人魔の一體。六日と安息日の不二なるを證して居る。之を支那にて天地人の三才と稱するのである。又六日の中。中間の四日は即ち四爻又四大にして。其應用變化極まりなき所。即ち四千年四百年四十日等となつて居る。蓋し我が十卷書にて體を云ふ時には必らず三

用を云ふ時には必らず四となつて居る。佛教にて三身四智と稱する者。即ち是れに外ならず。我が十卷書にて七の數は是れの加數である十二の數は是れの乘數である。而して又往々五の數を用ゐた處がある。百五十日、五王、五石五偶像等である。是れは單復の一を缺きたるものにして。佛教にて所謂惡差別惡平等の類ならんかと思はる。

斯くの如く余が考察を以つて多少當れりとすれば。我が十卷書も大に解し易き處がある。即ち雅各の子孫が三日間。埃及に拘禁せられしは四百年となつて居る。摩西が三日程我等の神を野に祭らしめよと云ひし處は。四十年となつて居る。基督が三日間葬られしは四十日の馬腹驢胎となつて居る。其外「ノア」の時降雨四十日。摩西の四十日四十夜飲まず食はずして。神前に拜伏せし。基督の四十日四十夜野に在つて試みれし等。必らず三の數より出でしことが確かである。視よ「アダム」が神と惡と自身とを分別し又生命と善と惡と偏見せし時は。直ちに是れ彼れの荆棘林である。それより四千年は即ち彼れの洗禮時間である。此の洗禮時間は即ち。基督の四十日四十夜に於いて證據せられて居る。

故に鑊湯爐炭の中に墮るか。天上の一錠に百雜碎せらるか。兎に角箇の身を粉塵して。「バベル」の塔の如く。摩西の二碑の如く基督の十字架の如く。瓦解氷釋して相俱に殿堂の幔幕も破るゝのである。之を佛教にて佛の轆轤に入ると云ふ。乃ち業識を打破して業識即佛性なることを悟るのである。最明寺時頼が。

大鏡高懸、三十三年。  
一植撃破、大道坦然。

と云ひしは正さに此處である。

前來長々しきの説明に由つて。讀者は。摩西が埃及に在ること四十年。「ミデアン」に在ること又亞拉比亞の野に在ること四十年。基督が三十歳にして世に出で。三年にして傳道を終り。三日間葬られし數も大略了解せしならん。兼て亦殿堂の幔幕が之を透過せんとすれば。四千年程を費さねばならぬ。縱令修行仕詰めて芳野紙一重のやうな處に至つても却々破れぬ。觸るれば即ち「シナイ」山の烈火である猶坂に車を推す如く。少しく油断しても。復た直ちに舊の四千年程の處に退かねばならぬ。此處是非共大死一番血を流すことが必要である。一旦復活すれば。「マナ」は是れ亞拉比亞の四十年程にして。之を食らひ盡すと同時に其の鶴鴉なることを知り。幔幕は即ち四千年程の關壁にして。其の神惡魔及び身軀なることを知り。先きに吾人を翻弄したる宇宙百般の事物は我が身是れなることを了し。又六日即安息日なることをも會得する事が出来る。余曾て一偈あり。

殿幕横、空隔、靈肉、

神人畢竟恨堪、添

胸間一滴當年水

流及兒孫猶未、殲

華嚴經と云へるは書物は龍樹菩薩が。龍宮より取り出したと云ふ。佛教にて大切なる經典である。

其の組織が殆んど。我が十卷書の一部を解釋したやうなものである。初め二三品の處は蓮華藏世界を説いて。「エデン」樂苑の當體である。其れより五千の波羅密を説く。即ち「ノア」の方舟摩西の紅海のやうなものである。波羅密とは到彼岸の意にして。此の岸より彼の岸に遷る難關である。一波羅密にても非常な年代を費し。又甚だ困難なる爲め。幾千萬代も生れ代り出代りして。修行を重さねば到底全程を通過することが出来ぬ。次に離世間品と云ふのがある。此處にて始めて修行者が。身を捨て、こゝろ泛ぶ瀬もあれの考へを経験成就する。即ち「ダビデ」の境界である。

又次に。法界品と云ふのがある。此處にては善財童子と云ふ者が。文珠即ち摩西に指示せられて。德雲比丘即ち基督のやうなるものに詣り道を問ふ。德雲比丘之れに三昧法を授けければ。視よ此の善財童子一刹那にして。前五千の波羅密を悉く通過して直に元の「エデン」に到達する仕組である。其五千の中には比丘、醫師、長者、女人、仙人、波羅門、童女、童子、居士、王、夜叉、船師、等である。我が十卷書にても十字架に死すれば直に基督に面會す。基督に面會すれば。即ち四千年間の。惡人善人男女老若悉く面會し畢て。直ちに天地を洞見する事が出来る。(未完)

パヘルルの塔(下)終

「パヘル」の塔(下)

六日の操作

大鏡高懸

三十三年。

一槌撃破

大道坦然

と云ひしは正さに此處である。

前來長々しきの説明に由つて。讀者は。摩西が埃及に在ること四十年。「ミデアン」に在ること又亞拉比亞の野に在ること四十年。基督が三十歳にして世に出で。三年にして傳道を終り。三日間葬られし數も大略了解せしならん。兼て亦殿堂の幔幕が之を透過せんとすれば。四千年程を費さねばならぬ。縱令修行仕詰めて芳野紙一重のやうな處に至つても却々破れぬ。觸るれば即ち「シナイ」山の烈火である猶坂に車を推す如く。少しく油断しても。復た直ちに舊の四千年程の處に退かねばならぬ。此處是非共大死一番血を流すことが必要である。一旦復活すれば。「マナ」は是れ亞拉比亞の四十年程にして。之を食らひ盡すと同時に其の鶴羽なることを知り。幔幕は即ち四千年程の關壁にして。其の神惡魔及び身軀なることを知り。先きに吾人を翻弄したる宇宙百般の事物は我が身是れなることを了し。又六日即安息日なることをも會得する事が出来る。余曾て一偈あり。

殿幕横レ空隔レ靈肉、

神人畢竟恨堪レ添

胸間一滴當年水

流及レ兒孫一猶未レ殲

華嚴經と云へるは書物は龍樹菩薩が。龍宮より取り出したと云ふ。佛教にて大切なる經典である。

其の組織が殆んど。我が十卷書の一部を解釋したやうなものである。初め二三品の處は蓮華藏世界を説いて。「エデン」樂苑の當體である。其れより五千の波羅密を説く。即ち「ノア」の方舟摩西の紅海のやうなものである。波羅密とは彼岸の意にして。此の岸より彼の岸に遷る難關である。一波羅密にても非常な年代を費し。又甚だ困難なる爲め。幾千萬代も生れ代り出代りして。修行を重さねば到底全程を通過することが出来ぬ。次に離世間品と云ふのがある。此處にて始めて修行者が。身を捨て、こそ泛ぶ瀬もあれの考へを経験成就する。即ち「ダビデ」の境界である。

又次に。法界品と云ふのがある。此處にては善財童子と云ふ者が。文殊即ち摩西に指示せられて。德雲比丘即ち基督のやうなるものに詣り道を問ふ。德雲比丘之れに三昧法を授けければ。視よ此の善財童子一刹那にして。前五千の波羅密を悉く通過して直に元の「エデン」に到達する仕組である。其五千の中には比丘、醫師、長者、女人、仙人、波羅門、童女、童子、居士、王、夜叉、船師、等である。我が十卷書にても十字架に死すれば直に基督に面會す。基督に面會すれば。即ち四千年間の。惡人善人男女老若悉く面會し畢て。直ちに天地を洞見する事が出来る。(未完)

## バベルの塔(下)終

「バベル」の塔(下) 六日の操作

消息及年譜

卷之二



## 消 息

◎明治三十七年七月丸山氏に宛てたるもの

我親愛する丸山兄よ兄若し依舊弟に同情あらば弟の茲に述べんと欲する所に向つて一掬の涙を灑がれよ弟は最早兄に向て布施を請ふの意なし否請ふの勇氣ないのである弟は基督龍樹以後天下に殆ど滅したる教義を興し所謂前人未發の言とでも謂ふべき復活の法を唱へ傍ら自分の修行も怠らず東京に出た以來も五人六人の師匠にはいつも離れずして今日におよび彌々成効の上は天下は我物なりとの希望も胸中熾々燃え上り居候然るに今となりて従前豫想したる希望も名譽も皆我身の仇と相成候神は全く我身を地獄の底に擠陥して弟を生理に致居候弟は今更死するには死せられず生きるには生きられず苦痛の底に呻吟罷在候弟は基督に面して其の默示を受け龍樹に相見しては其托宣を得衝天の志氣自ら禁する不能如何なる苦痛も何のそのと云ふ覺悟なれば苦痛も何もなきやうなれども實際は然らず實に堪へがたく候。

此苦痛の原因は貧なるか然らず過失多きが爲めか然らず乃至弱質の爲めにもあらず不徳の爲めにもあらず況んや無學無修得の爲めにもあらず近頃始めて發見する所實に左の原因に外ならず候基督曰く我れに善き食物あり我道を他に傳ふ是れ即我食物也と彼れ基督は實に其弟子を得て之に道を傳ふるを

以て食物とせり若し彼れに之なかりせば廢食飢餓も同様に御座候事佛教儒教に徴して同一理に御座候弟は釋迦孔子耶蘇等に何故彼れが如き憂愁ありしやと平生疑問有之候然るに今日始めて我身に比して先輩の苦痛を察し申候弟も近頃意志の力は随分鍊り上げ候方にて三日四日食を廢する位は意とせざる勇氣有之候無論マサカの時は斷乎相惑はざるの覺悟に御座候然れども我道の他に傳はらざるの一事に至ては殆ど其苦痛難忍候筏に乗て海に浮ばんと思ひ又一層の事自殺しやうかとも思ふ然れども折角天より托宣せられ無上の發明を此儘滅するは甚殘念なる次第何分惜しくて棄てられずさらばとて別に致方も無之故先づ々徳智を發揮することに勉居申候此上は唯徳を高くするより外はないと相考日夜の修行此事にのみ只管肝腦塗地修養罷在候日外兄の寫眞を頂戴し并に御胸襟を披瀝して毫も覆はざるの御手紙も繰返し拜見いたし候又寫眞の裏には十字架教信徒〇〇〇〇と大書したる御懇情も拜し候乍ら今度の御手紙にいろく御尋越しの問題は一入弟に感動を與へ申候他なし是れ前に所謂弟の食物なるが爲の故なりと存候

霹靂一聲頂門關

喚起從前自家底

ゴロくくくくくビシヤリ

是れにてよろしく候一遍上人曾て千光國師に相見し其の安心を問はれたる事有之候上人一句の歌を以

て其の見所を呈せられ候

唱ふれば佛も我れもなかりけり

南無阿彌陀佛の聲ばかりして

千光國師申さるゝには其れにては未だ佛に入て魔に入らず什分の所に達せずと申され更に一首の歌を以て返され

唱ふれば佛も我れもなかりけり

ナムアマミダムくくくく

佛もナムアマミダブ我もナムアマミダブ心境皆ナムアマミダブ森羅萬象天堂地獄佛も魔も南無阿彌陀佛なりとの意にて南無阿彌陀佛を客觀に見てはならぬ自分即南無阿彌陀佛即ちゴロくくくの一聲に御座候是れより復活の當體は可被見候

庭の石に角二三尺蝸牛

來示の句も能く出來居候得共一遍上人の所謂『聲ばかりして』の理窟情障を免れざる所有之候哉に相見え申候瀧然たる所を欲しく候

天地破れよ一聲ほととぎす

此際決して一聲の天地は無之候因て

一聲の外に物なしほととぎす

兩句共に舊作に御座候

道隆禪師投機の偈に

一槌擊碎續靈窟。突出那陀鐵面皮。

雙耳如響口似甕。等間觸著火星飛。

坊さんの讀み方自ら別なる爲乍失禮假名を付し申候不惡御了承可被下候那陀とは鬼の事に御座候是れ如何なるものを指すにや御判斷可被下候ツツカリ手を著くれば火花が飛ぶぞとの意に候先づ理觀の精靈窟に天槌一打必要に御座候即ち百雜碎と云ふ所に候即ち十字架に那陀の鐵面皮と申して手を焼く所有之候地獄も天堂もゴロ／＼の外はなしと被思召一意専念御參得被遊候得者追々明了可致候如此事のみ申居候間は弟も一打髪を消し候得共東京も最早弟の眼中千遍一律に相成候弟は唯兄の身上を羨しく思ふ耳に御座候御計畫圖に當り隨分御樂の御事察上候四月以來獨居著述に従事し廿日頃擱筆致候處何分不満足にて一火に付し去申候是れにて丁度著述も三度失敗致候所詮神は弟に解釋者たるを不許一時は失望致し候得共又能々願み候得者天は或は弟をして一の解釋者に止めず更に實際的の事業を世に施させ可申に哉と氣を鼓し勇を振うて只管德智の修行不怠候得共今更實に志氣銷沈何を申上候も勇氣無之候

弟身體は先以て健全の方御安神可被下候若し弟に繼いで當年の『ヨシユア』を爲すものあれば弟は死しても少しも惜しからず候唯後繼者一人なりとも出來ずしては何分死し兼候

讀誦功德の事最も難解難入に候追て申上べく候是れが相分り候得者宗教家の本分相立候も同様に御座候古人も是れに頗る難せし處に候追々説明可致候佛儒共に是れより以上の事は無之候御尊父様此節如何被爲入候哉御大事に被可遊候

時下御自愛專一に被存候只今の御事業御設計も先以てよろしく何卒乍此上御盡粹可被遊候先日の海軍大捷利は御同様目出度存候陸戰も無程花々敷一勝負堅唾を呑んで控居申候構和も大抵は調ひ可申所に御座候

何卒折々御手紙被下度候弟も此後者必らず御返事可致候紙もなく郵便錢もなき時は致方無之候併し教義に付て御疑問有之候節は何時にも不怠御返事可致候右草々不一

七月二日

惟拜具

丸山大兄侍史

◎四十三年一月即ち信州より歸へられし翌春早々の昔信信州の友人  
野溝傳一郎氏に宛たるもの

(前略) 扱弟廿三日二番瀛車にて長野を發し候北佐久一帯の地雪もなく輕井澤に着きしは十一時五十分停車場にて賣候蕎麥を喫して信州の名物も當分の喰おさめと味も格別大盛三杯を盡して冷腹を温め頓て碓氷峠に掛れば音にも聞きし通り劍山刀樹頭を攀れば嶺上の舊道雲間に連りて逶迤たる邊見おろす處には溪流底清く廿五六の隧道限りも無く生れてからこんな愉快は始めてに有之候車中の寒氣も  
の退屈も打忘申候妙義の怪岩淺間の壯大諸所停車場の幽光身は仙化する斗りに有之候それより赤城榛名諸山平野に突降するを眺めて高崎に着候得ば停車場に海拔三百九尺と有之候回顧すれば是まで四千何百尺の高地に罷在候身を始めて心付申候實に信州と申處は山岳重疊而かも其最頂嶺の一窪地に候弟松本を離れて明科驛に掛りし時豊科村は此邊なるやと車中の人に問候處彼處なりと對岸の一部落を指示せられ會て當地にて親みし〇〇一族の住家も定めて指呼の中に在らんと思へば殊更懐しく且は南信の盡くる處無限の情緒俄に相糾れ申候去れど無情なる時間と瀛車は弟を拉し去りて暫時の徘徊をさへ許さず九十九折の細山道を縫ふが如くにして進むこと十里餘忽一望豁然する處に出れば茲は名に負ふ娘捨山川中島の平野を一時に收めて東壑より流れ出る筑摩川に沿ふて下る信越線は又一段の好風景我等と篠井驛にて落合ひしも我思ふ人はあるやなきやと問ふ間もなく頓て長野に着き申候

此時より後は頻りに北信の山河を研究したく思ひ候も既に何日までには歸ると東京に申遣候後の事なれば一應歸りて再遊を契り翌朝勿々に打立申候南信人に問へば北信を餘り賞めぬ方北信人に言はずれば南信人を頻りに昔居申候次第にて弟も聊相惑申候面相ばかりを見て背相を察せざる小生多少物足らぬ處も有之候杜撰之妄評躊躇いたし候得共仰せに従ひ茲に其一面を論すれば商業道德丈けは或は北信の方進歩し居らんかと存候人氣も亦一短一長を不免比較的北信は多少辛毒屹缺なる代りに或は深宥なる處無御座やと被察候

信州は江戸系統名古屋系統其外畝澤系越後系有之頗複雑を極候それに松本の如きは領主の交代頻繁にして其度毎に百姓町人を劫掠せしこと不尠風俗頹敗往時之困弊被思遣申候其外とても苛敏到處に甚しく君臣之情誼と云ふものは諏訪を除くの外殆不可見但し諏訪とても徳川の政策として勉めて土地を富ましめざるの方針を取候事疑なく士分内に窮すれば百姓外に追誅せらるゝは自然の常態にて從來人情の厚き處とは思はれず候唯一般の節約士分の勤勉等興りて辛くも相支來候ものと被存候飯田の堀家は頗ハイカラにて虚榮心に富み周圍の白河領高須領其他旗本領天領等に巾を利かせし振舞は其跡歴々可徴士族は骨董書齋茶の湯等を玩びしこと其一に有之候様存じ殊に中島街道の集散地にして昔の驛場風は自然に相免れざる所獨り高遠之内藤氏に至ては餘程家風を異にし儉約を旨とせしは無論の事學問武藝を奨励せしは松本諏訪飯田之比に非らず山間の一小天地に僻居して其勝手向も時々百姓町人を惱ま

◎四十三年一月即ち信州より歸へられし翌春早々の書信信州の友人  
野溝傳一郎氏に宛たるもの

(前略) 扱弟廿三日二番瀛車にて長野を發し候北佐久一帯の地雪もなく輕井澤に着きしは十一時五十分停車場にて賣候蕎麥を喫して信州の名物も當分の喰おさめと味も格別大盛三杯を盡して冷腹を温め頓て碓氷峠に掛れば音にも聞きし通り劍山刀樹頭を攀れば嶺上の舊道雲間に連りて透迤たる邊見おろす處には溪流底清く廿五六の隧道限りも無く生れてからこんな愉快は始めてに有之候車中の寒氣も退屈も打忘申候妙義の怪岩淺間の壯大諸所停車場の幽光身は仙化する斗りに有之候それより赤城榛名諸山平野に突降するを眺めて高崎に着候得ば停車場に海拔三百九尺と有之候回顧すれば是まで四千何百尺の高地に罷在候身を始めて心付申候實に信州と申處は山岳重疊而かも其最頂嶺の一窪地に候弟松本を離れて明科驛に掛りし時豊科村は此邊なるやと車中の人に問候處彼處なりと對岸の一部落を指示せられ會て當地にて親みし〇〇一族の住家も定めて指呼の中に在らんと思へば殊更懐しく且は南信の盡くる處無限の情緒俄に相糾れ申候去れど無情なる時間と瀛車は弟を拉し去りて暫時の徘徊をさへ許さず九十九折の細山道を縫ふが如くにして進むこと十里餘忽一望豁開する處に出れば茲は名に負ふ娘捨山川中島の平野を一眸に收めて東壑より流れ出る筑摩川に沿ふて下る信越線は又一段の好風景我等と篠井驛にて落合ひしも我思ふ人はあるやなきやと問ふ間もなく頓て長野に着き申候

此時より後は頻りに北信の山河を研究したく思ひ候も既に何日までには歸ると東京に申遣候後の事なれば一應歸りて再遊を契り翌朝勿々に打立申候南信人に問へば北信を除り賞めぬ方北信人に言はずれば南信人を頻りに嘗居申候次第にて弟も聊相惑申候面相ばかりを見て背相を察せざる小生多少物足らぬ處も有之候杜撰之妄評躊躇いたし候得共仰せに従ひ茲に其一面を論すれば商業道德丈けは或は北信の方進歩し居らんかと存候人氣も亦一短一長を不免比較的北信は多少辛毒屹缺なる代りに或は深宥なる處無御座やと被察候

信州は江戸系統名古屋系統其外畝澤系越後系有之頗複雑を極候それに松本の如きは領主の交代頻繁にして其度毎に百姓町人を刳掠せしこと不埒風俗頹敗往時之困弊被思遣申候其外とても苛斂到處に甚しく君臣之情誼と云ふものは諏訪を除くの外殆不可見但し諏訪とても徳川の政策として勉めて土地を富ましめざるの方針を取候事疑なく士分内に窮すれば百姓外に追誅せらるゝは自然の常態にて從來人情の厚き處とは思はれず候唯一般の節約士分の勤勉等與りて辛くも相支來候ものと被存候飯田の堀家は頗ハイカラにて虚榮心に富み周圍の白河領高須領其他旗本領天領等に巾を利かせし振舞は其跡歴々可徴士族は骨董書齋茶の湯等を遊びしこと其一に有之候様存じ殊に中島街道の集散地にして昔の驛場風は自然に相免れざる所獨り高遠之内藤氏に至ては餘程家風を異にし儉約を旨とせしは無論の事學問武藝を奨励せしは松本諏訪飯田之比に非らず山間の一小天地に僻居して其勝手向も時々百姓町人を惱ま

す等の事もせず人情も稍厚く君臣の情誼も他三藩に比して多少相勝候所も有之候半乍去信州と申處は總じて他國諸大名と大に其施政を異にし領主の百姓町人に對する殆ど一時の預りものといふが如き感なきに非らず百姓町人も亦領主を目して永久の信頼者と不仰殿様は人間以上の者侍は恐しきものどのみ思候半歎此間に處して彼の僧侶なるものは何れに加擔せしか是れ研究之第一問題に御座候抑々日本の佛教なるものは往昔に溯りて之を察するも決して貧しきもの哀めるものゝ友にあらず彼等は施主に等級を立て、寺を起し僧を致し寺領を寄附し什物を訓進するものを以て最も佛縁に深きものとし貧しき者に對しては無縁も同様殆ど能縁所縁の道なきものゝやうに相心得全く貴族宗として只管貴族之藩塀を以て維新前まで馴致し來りしものたること歴史上一々證せられ申候眞宗日蓮宗を平民宗なりと申候得共所謂オスラエル系統の平民的道德を有せしものに非らず蓋しイスラエル系統の道德本義は畢竟福者を高め下層者を揚ぐるといふに外ならず之に反して支那系統の道德は其忠孝主義にしても強者を保護せんには如何せば可ならんか即ち権力者の位置を永久に保存するの法如何にせば其術を得たるものなるかの研究より割出したるものに外ならずして所謂高き所に名譽を留め雲間の虹に我誓ひを托する洪水以前の文明を傳へたるものなる事今更疑ひを容れず斯くて維新後イスラエル系統の文明は入り來りて魔王と其眷族とは去り働いて取り競うて進み智者學者元來其種あるに非らずと覺りて後は何を苦て彼等の藩塀たりし僧侶に便り可申一朝にして之を唾棄するは自然之勢に候是れ佛教の衰へたる原因

にして維新前まで彼等は何を爲しつゝありしか衆生濟度は全く名のみ實は貴族之保護者富者の友として立居りしを彼の君臣之情誼に乏しき信州人に洞破せられ候ものならむ徳川氏の政策之天下一般に彼等を利用せしものにして殊に天領地譜代大名地の本場たる南信地方に著しく其痕跡を見申候維新前歴制之影響として不知不識平民主義を謳歌する信州人の宗教を度外視するは理の當然坊主憎くけりや袈裟まで憎い貴族に依頼せざると共に坊主にも依頼せざるは元來名古屋系南信人の北信に比して教義といふものを明かにせざりしにも基き可申不得止之議と存候併し人として決して宗教心なきものに非らず何かは希求いたし居る事例へば御地方にても報徳會やら修心會やら歸依者多く又教育界に向ては或者を探り婦人會に出で、は或物を得んとする人情の機微は事實上に觀察せられ申候、信州人の氣質は山河の形勝に養はれ居る處多きは申までもなし崇高なる處潔介なる處自立心に富み精進力に豊にして實に欣羨之至に不堪懦弱放恣なる小生等の耻入る處に御座候其間に或は短處も伴ひ居候半去れど從來之小國民風を脱して是より世界的氣象輸入するに連れ舊來の癖を自覺致候事不遑中に期し可被得存候且又信州人の多方面なる例へば故太宰春臺佐久間象山現時之伊澤修二福島安正澤柳政太郎田中芳男中村彌六辻新次等實に四通八達渡邊無邊の如きに至つては天下に類もなき程の多藝多能又其多角面の交際には皆人の驚く所に御座候是等は多數小領地の入込居りし結果にして、々々人情風俗を異にし多種多様の系統より成立したる土地に生れては自然多方面に刺戟を受け多方面に鑄冶せらる

の道理従て其弊は淺矣廣矣の嫌ひは不免候併し信州人は至極單純なる生業を營み罷在上伊那下伊那共に單に養蠶のみ諏訪の如も製糸の外は寒天とても副産業に止り松本の米作木曾の木材と云ても其融通機關を養蠶之一業に向て其中堅を托するより外無之自然の趨向終に信州人は養蠶單業の國人と相成可申存候北信とても小生先に飯田邊にて見たる桑園に比し桑樹の倭小なること哀はれ不慙に相眺申候それにても尙水田を惜氣もなく潰して桑を植付け居候を見れば畢竟之に敵するの産業は有之間敷自餘之工業僅に副産物として存するに至らむ只今の有様にては複雑なる生産物も工業品も無之思想も自然單純に傾きつゝあるは暗裡に憧憬せられ居申候

乍併他日最も有望之土地柄たるは小生の職分として産業之富よりもむしろ蛟龍潜躍之大澤たる點に囑望いたし候事勿論に御座候然るに茲に信州人發展上一事の障害物有之多少目障と相成候之を取除くこと恐く容易の業にあらず三百年來養成之結果其此に至りしものにて實に惜むべく又信州人の爲めに氣の毒に堪へざるの一事に御座候といふは他なし信州人殊に南信人の察なることに御座候抑々人に知られざるを憂へず人を知らざるを憂ふと古人の云ひしも其意那邊に在るか決して人に欺かれざるのみを以て明とせしに非らず寧ろ人に欺かれ易く表情的に喜怒の淺きを以て大人豪傑の特性とせしものに可有之存候東京にて信州人に逢へば大方の人が能く人を見るとか見へぬとか云ふ誠に信州人は能く人を見るの人又能く人を察するの人に御座候能く人を知り又能く人を鑑する方には無之候是れは前に申通

り周圍の複雑なる關係上自然御役人には欺かれまい他領の人には誑されまいと常に用心して世を渡りたる結果に外ならざるべく最初旗本領天領等に最も此の風行はれ大名地にも自然感染せしものに可有之存候無論兩者の間には多大之相違は有之候者ならんも後には一般に免れ得ざる一種之風土病と相成候者に可有之此に至つて不一致を主としたる徳川政治の巧妙感嘆の外無之而して此弊は佐久間象山渡邊無邊等に至つて彼等不可掩之看板を掲げ居り著しく世間に目立申候決して統領の器には無之同卿或は同黨の人に對して所謂卿愿たるべきも聖人の道に入ること千里萬里隨分遠いこと存候抑々聖人の所謂人を知ること其長所を捉らへ美所を領して人を失はず譬へば男女相戀して互に一局部相同する處あれば他を顧みず痘痕は笑窪となり腋臭は麝香となるの類親の意見も世の笑ひも空吹く風手に手を携へて駈落嘶や淵瀬に身を投ずる心中物語は餘りに極端かは不存候得共兎に角相思の深き愛着の強き處に其懸を見其然を見同時に其英雄を見其君子を見可申孔子の所謂其愚不可及も乃至見過此知仁も此處若くは此邊の近き處に可有之存候信州人には恐くは此愚人なき代りに亦決して英雄豪傑をも不可座候其處鮑の片思ひもよろしく又よしや相手は吸血鬼の魔女妖婦たるも此方より論らぬ戀に身を獲して他の利害を犠牲にする底の人物ならば斯道之事始て共に可語西郷南洲が月性と身を沈め又海舟翁の所謂我身一つを打捨て若殿原に報ひなんの覺悟も彼が所謂愚を可想見候此處譬喩は一々當らぬかも知れぬが兎に角御互之修養上最も工夫を凝らすべき一大事の處と奉存候

渡邊無邊善く神を知り、又善く神を言ふ作併神と善く心中する人にあらず小生在信中或處に於て人と談話之際不圖發明する處有之突然聲を發して信州には大洪水來らむと叫出候處皆小生の狂を笑ひ申候扱茲に若し六十歳位までは實に失策多くして世にも嗤はれ人にも忌まれ後七十歳までに成功せしと云ふ人あらば其人は確かに眞物にして最も可嘉候人に過失なかれと教ゆるものは是れ小乘過失止むを得ずと教ゆるものは是れ大乘夫れ小乘之極には佛教に徹しても我十字架教に徹しても必ず大洪水來りて實例有之今や信州も外柔内險之極飯田地方の如き偽善其頂上に達居候此際三三人も惡漢〇〇の如きもの出で、忠信篤敬の信州青年を擾亂し圖らずも是等の人々一面に成功して所謂〇が忠良の臣民を以て濟まし込る社會に不意打を與へ其時伶俐圓滿も間拍子に合はず從來之確信破れ候時は即大洪水之時節と奉存候此事蓋し遠きにあらざるべきを小生預言せしにて候信州の地山河の形勢は其自然の感化に任かすれば決して從來の如く人をして圓滿伶俐ならしむる筈なし舊制度の遺影として尙今日あるを不察無理に其惰力を保続せんとせば基督の所謂古き革蕪に新き酒を盛るの類其能く破裂せざるまでも勢元氣銷沈せざるを得其中反面より一種の波動起り來るは鏡に掛けて見るが如くに御座候舊思想と新思想の暗闘は不遠中に演せられ可申小生若し北信之方研究致候は多少之徵候は今より已に見出し得可申と奉存候信州に就てのみ斯く申様なれども實は西洋人より我日本を眺候はゞ丁度其如くなるべしと存候支那人に朋黨心あつて團結心なしと人の論するが如く日本にも若し神と心中するの風俗起らざ

る限りには決して團結心は望み得られまじく皇室と能く心中するものは唯干戈の時のみに御座候平時世界の競争場裏に立て随分心細き限りに候信州人を救ふものは必ず我十字架教なるべく佛教も耶蘇教も決して不足頼存候向後小生は只管信州人傳道に骨折可申〇〇に一二粒之種子落候儀神之御意も被知候東京にても亦極めて無垢之者より教養して二三十年後の成功を期し居申候今日の信州青年を見て土地柄本來の面目となすものは天下の趨勢を無視し山河自然之陶成を度外視するものに候今より十年後には後れ者固陋組と呼ばれ候事必然と存候それに就て兎に角朝夕梵魂相纏候ものは足下より外になし我十字架教に於て唯一の妖術有之即女と心申するものは女を得金と心中するものは金を得神と心中するものは神を得人と心中するものは終に人を得るの道理我エホバの神は烈々の嫉妬火性三昧之愛染明王に御座候不圖も信州に一箇の戀人を得候事神を攝理と存じ候得ば末永く御交情願上候及ばぬ戀の片思ひ沙干に見えぬ沖の石の乾く間もなき涙とはチト女々しいとの御下げすみ御恥しくぞんじり得共赤心黒甲の守官の黒焼を振掛けられたる我郎の木石ならざるはかねてより信じて疑はざる所に御座候 (一月二日)

(下略) 追伸此書面二日午後より認始め翌三日午前までに出來申候讀反して見て冗長複雑自分も其意を不解諸所抹殺改稿實に此儘にて差上候儀甚だ不禮と存改書致可候考にて差出見合置候得共御懇意柄御許を願て此儘差上候御此讀可被下候



## 明治四十年一月知人に宛てたるもの

御揃益御壯健に渡らせられ珍重御儀奉存候何卒皆様と宜敷御傳言可被下候然者小生も其後身體よろしく舊冬より市中も一般に潤ひ候まゝ何となく我等迄も賑やかに春を迎居申候何より嬉しきは私御地に罷在候時分より十字架教の讀者日に増し色添へて人數も意外の中より我れもくくと申込候者有之此節は冬枯れの草一時に青々いたし候心地いたし候扱先達貴兄よりの御手紙に其當時出埃及記御讀了の由私も不圖聲を放つて神に感謝致候元來殊に我十字架教は自信入と申して最初意味を辿りて入る人は百年の讀誦を重候ても到底其甲斐なく何が何やら解らぬ儘に朝夕讀誦する人は屹度成効可致意味は時節到來致せば一時に分明いたし丁度暗夜より日中に出る心地致候者に御座候故に決して理解を急ぐの必要無之唯々讀誦に有之候

咬<sup>スレバ</sup>被<sup>ル</sup>鐵酸<sup>ニ</sup>餡<sup>ハ</sup>百味具足と申事御座候之を能々御合點可被遊候鐵酸餡(テッサンナンと讀候)とは鐵饅頭の事齒も爪も立たぬものに御座候得共一度是を咬破する時には其中に百味具足いたし候意を申たるものに御座候禪宗などでは公案と申ていろく難問題有之候之には如何なる學者も智者も閉口いたし候師匠に打れても蹴られても辛抱して修致候通常三十年之辨道と申候尤も半年位にてパット眼の開く人も有之候得共決して眞物にあらず少くも七年位は一則の公案に首を差込む必要有之候其等に比す

れば我十字架教は誠に易きものに御座候それに一章讀めば一章の功德有之最初から多少の趣味もありて決して鐵酸餡のやうなものに無御座何卒不怠御讀誦願上候

昔雲門と云ふ禪宗の智識有之其人に向て或坊さんが如何<sup>ナルカレ</sup>是佛と問ひし處雲門は乾屎橛と答へ候乾屎橛とは糞籠の意にて今日の禪宗も是等の公案を能く考へさせ候

若し之を乾屎橛とは糞籠のことだから糞籠にも佛性あり雪隠の中の蛆からも光明を發する道理だなどと思ひ義解情量して工夫する時には所謂邪禪と云ふものに陥つて浮ぶ瀬は無之候例令百年修行いたし候てもそれは偏修と申者に御座候唯々乾屎橛乾屎橛二年も三年も乃至十年にても三十年にても無意味沒交渉に乾屎橛一乾屎橛一と腹の底にて味ひ決して頭腦の智慮分別を不用吃々座禪に怠らぬ時には所謂鐵酸餡を咬破するの道理一時に豁然として貫通する所之有候丁度如此我十字架教も不怠讀誦を重居る間にはいつかは瓦解氷釋ガラリと破れて十二卷經を脱化致す處有之候實は小生も色々工夫いたし何とかして今少々入り易く門戸を立度ものと思ひ已に十年間も探索いたし候得共史に此外の門なし何としても讀誦功德より外の入口は無之唯此一門のみに御座候基督が窄門より入れと御教被下候も畢竟は此讀誦の門即極めて難入難關の窄き門に御座候天國と云ひ極樂と云ひ門は唯一つより外無之此門を潜らぬ人は一生樂園に不能入の人に御座候かねて○君にも申候に通に付○君是迄實驗の程も御参考に御聽取可被遊候

何卒御兩親様を始め皆々様へ宜敷御傳言願上候○君御上京日に御待申居候一同よりよろしく草々頓首

一月十六日

敬

潤作尊兄座下

明治四十一年萬朝報の記事に依り教義を聽質せし  
人に送りし一書

拜復久敷病床に御呻吟之由此方にも御同様の病人有之誠に御同情の至奉存候然者萬朝報之記事にて小生の醜面皮御想望被爲在早速御情報に接し慚愧之至奉存候奇人には自然奇行も可有之候得共小生自身にては逸話も奇行も更に不思議唯貧乏と孤獨耳は或は世人目して奇とも狂とも可稱哉兎に角小生も是一種の病人に相違無之候得者茲に深き御同情を以て一言御返事致候佛者に業因業病坏申候事有之吾人は此業因業病の外に生存の道可有之哉此邊篇と工夫致候儀是宗教一般の修道法に御座候因而先苦毒煩悶十字架上の基督を御覽可被成候親愛の弟子にも被捨兄弟朋友にも被捨國土人衆に被捨更に亦大事の神にも被捨全く天地暗黒と相成候時の言葉に『神よ神よ何ぞわれを棄給ふや』の怨嗟是れ彼れが最後の叫喚に有之候如斯斷末魔の苦楚を経て始て絶後再蘇るの道可有之候願て小生も幾十回否幾百千回此嗚呼神よの悲鳴相發候乍去真に此端的の場より復活致得者尙從前の煩悶憂病等一時に掃却致

候小生の友人にも此例澤山有之候何卒足下も基督最後の言葉に御同情可被遊候是佛教にて所謂般若波羅密多の道理に御座候

併し順序として我十二卷經朝夕御讀誦可然候創世記、出埃及記、利未記、民數略記、復傳律例、約書亞記、士師記、路得記、撒母耳記前後、列王記略上下、以上十二書之を十字架教の十二卷經と申候此十二卷經に現はれたる記事と「エホバ」を以て後の福音傳中に現はれたる基督と其の面目とを御研究可被遊候又基督を以て前の十二卷經を御観ひ被遊兩々相照して御覽可被成候必徹根徹髓の時節可有之候佛教の七千餘卷般若波羅密多を離れざるが如く四千年間の歴史一々十字架を離れ間敷候常々唯十字架を心に御納可被遊候儘に御病氣も去可申被存候我十字架教にては讀誦功德と申事有之朝夕十二卷經を讀誦して其功德を享受する是我十字架教唯一の儀式に御座候復活の道理も如斯して進々御合點可參候小生の友人に○○○と申人有之中風にて足下同様に氣毒之身に御座候足下の御書面拜見被成同情の涙を被濺申候不遠中往訪可有之候又十字架教會員中に○○○と申篤信の者有之其中爲相伺可申候同人は醫師に御座候得者同時に御容體をも爲相伺可申書餘更に可得貴意候草々拜復

十二月廿二日

本川 惟 敬

千松與四郎様

侍 史

消息、年 譜

何卒御兩親様を始め皆々様へ宜敷御傳言願上候○君御上京日に御待申居候一同よりよろしく草々頓首

一月十六日

潤作尊兄座下

敬

明治四十一年萬朝報の記事に依り教義を聴質せし人に送りし一書

拜復久敷病床に御呻吟之由此方にも御同様の病人有之誠に御同情の至奉存候然者萬朝報之記事にて小生の醜面皮御想望被爲在早速御情報に接し慚愧之至奉存候奇人には自然奇行も可有之候得共小生自身にては逸話も奇行も更に不思議唯貧乏と孤獨耳は或は世人目して奇とも狂とも可稱哉兎に角小生も是一種の病人に相違無之候得者茲に深き御同情を以て一言御返事致候佛者に業因業病杯申候事有之吾人は此業因業病の外に生存の道可有之哉此邊篇と工夫致候儀是宗教一般の修道法に御座候因而先苦毒煩悶十字架上の基督を御覽可被成候親愛の弟子にも被捨兄弟朋友にも被捨國土人衆に被捨更に亦大事の神にも被捨全く天地暗黒と相成候時の言葉に『神よ神よ何ぞわれを棄給ふや』の怨嗟是れ彼れが最後の叫喚に有之候如斯斷末魔の苦楚を経て始て絶後再蘇るの道可有之候願て小生も幾十回否幾百千回此嗚呼神よの悲鳴相發候乍去真に此端的の場より復活致得者尙從前の煩悶憂病等二時に掃却致

候小生の友人にも此例澤山有之候何卒足下も基督最後の言葉に御同情可被遊候是佛教にて所謂般若波羅密多の道理に御座候

併し順序として我十二卷經朝夕御讀誦可然候創世記、出埃及記、利未記、民數略記、復傳律例、約書亞記、士師記、路得記、撒母耳記前後、列王記略上下、以上十二書之を十字架教の十二卷經と申候此十二卷經に現はれたる記事と「エホバ」を以て後の福音傳中に現はれたる基督と其の面目とを御研究可被遊候又基督を以て前の十二卷經を御視ひ被遊兩々相照して御覽可被成候必徹根徹髓の時節可有之候佛教の七千餘卷般若波羅密多を離れざるが如く四千年間の歴史一々十字架を離れ間敷候常々唯十字架を心に御納可被遊候儘に御病氣も去可申被存候我十字架教にては讀誦功德と申事有之朝夕十二卷經を讀誦して其功德を享受する是我十字架教唯一の儀式に御座候復活の道理も如斯して進々御合點可參候小生の友人に○○○と申人有之中風にて足下同様に氣毒之身に御座候足下の御書面拜見被成同情の涙を被濺申候不遠中往訪可有之候又十字架教會員中に○○○と申篤信の者有之其中爲相伺可申候同人は醫師に御座候得者同時に御容體をも爲相伺可申書餘更に可得貴意候草々拜復

十二月廿二日

本川 惟 敬

千松興四郎様

侍 史

消息、年 譜

明治四十年四月吉本襄氏に送りし書

拜啓修養界は非常によろしく小澤氏も清澤氏も大賛成に有之候  
弟も禪の肩が一先脱けてより餘程心も閑に相成候ヲト此後は世間的の眼でも養ひ可申候乍去今二三年  
は學問の窠屈を離れ得間敷今暫時の辛棒に候御一笑可被下候

四月十六日四時

忘庵 足下

惟

# 消息終

## 詩

世人多是好談玄。不識真機自有傳。  
甘露門開無別事。古燈明下見因緣。

四海五湖曾問津。禪河猶未洗風塵。  
梅窓夜冷南山雪。懸得天邊月一輪。

### 十字架

殿幕橫空隔靈肉。神人畢竟堪添恨。  
胸間一滴當年水。流及兒孫猶未殲。

欲作人間未作詩。會遊人間未遊山。  
唯爲雲霧擁溪口。常使後生迷躋攀。

由也昇堂未入室。狂簡之徒不解真。  
勿謂孔聖元無師。鄭衛間有衛夫人。

己酉歲旦咏基督

說凶勸亂不求和。毀却神殿放著魔。  
一死昇天何所見。分明猶太舊山河。

年譜

安政六年 長崎縣西彼杵郡時津に生る

明治五年 外國語學校に入り佛蘭西語及び英學を修む

同 七年 大學豫備門に入學中途病を得て退校

同十三年 北海道函館に往き一致教會に入り始めて基督教を修す

同十八年 上京希臘教を修む

同十九年 長崎に歸り同地英國監教會に入る

同廿二年 天主教神學校に入り卒業牧師となる

同廿四年 長崎曹洞宗皓臺寺玉仙和尚に就き禪を修む

同廿六年 玉仙和尚より允可證明を受く

同年起つて「我は神なり基督の再來也」と絶叫せしも人の來りて道を問ふものなく却て  
狂人視さる

同廿九年 再び郷を辭し眞宗に入り其教義を究む

同卅一年 上京基督教の眞義を説き廻りしも用ひられず、聖胎長養の必要を感じ臨濟宗に投じ西山

1192  
11

禾山、南隱禪師、俄山禪師等の諸師に參禪す

同卅三年 鎌倉に往き宗海老師及び程ヶ谷峰尾大休師に參禪す

同卅四年 京都に遊び天臺宗に入り同宗を修む

同年高野山大學林に學び山縣増正より阿字觀の證明を得、此時又所謂眞言の秘密部を研

究し證明さる

同卅六年 諸氏に擁せられ東京本郷區駒込千駄木林町にて教義を布きしも次年種々の障害にて閉鎖

す爾來悠々自適の生活を送れり

同四十二年 十一月七日午前四時卒去享年五十一歳

著書 鳴鼓錄 明治三十一年稿

聖教新論 明治三十一年稿

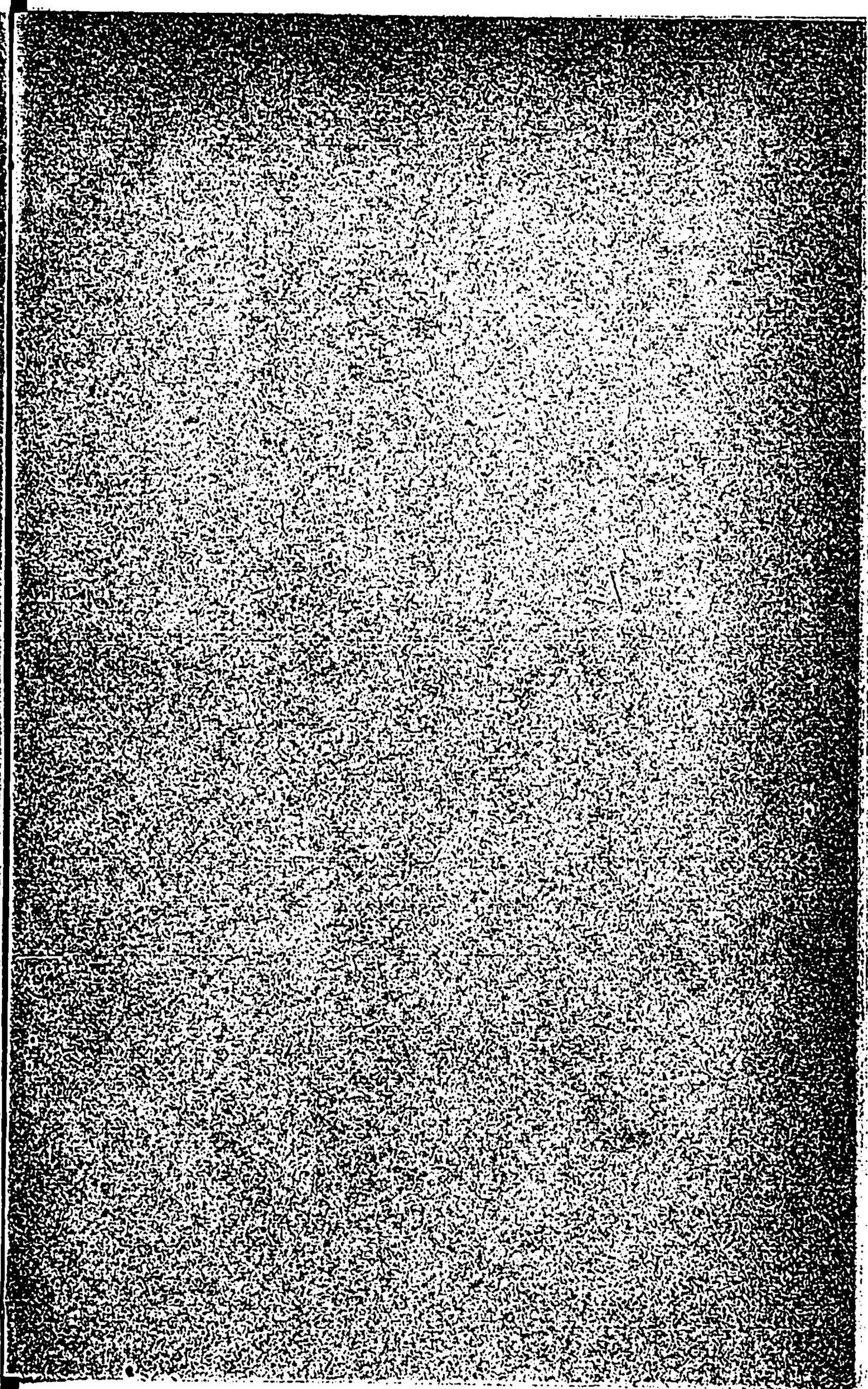
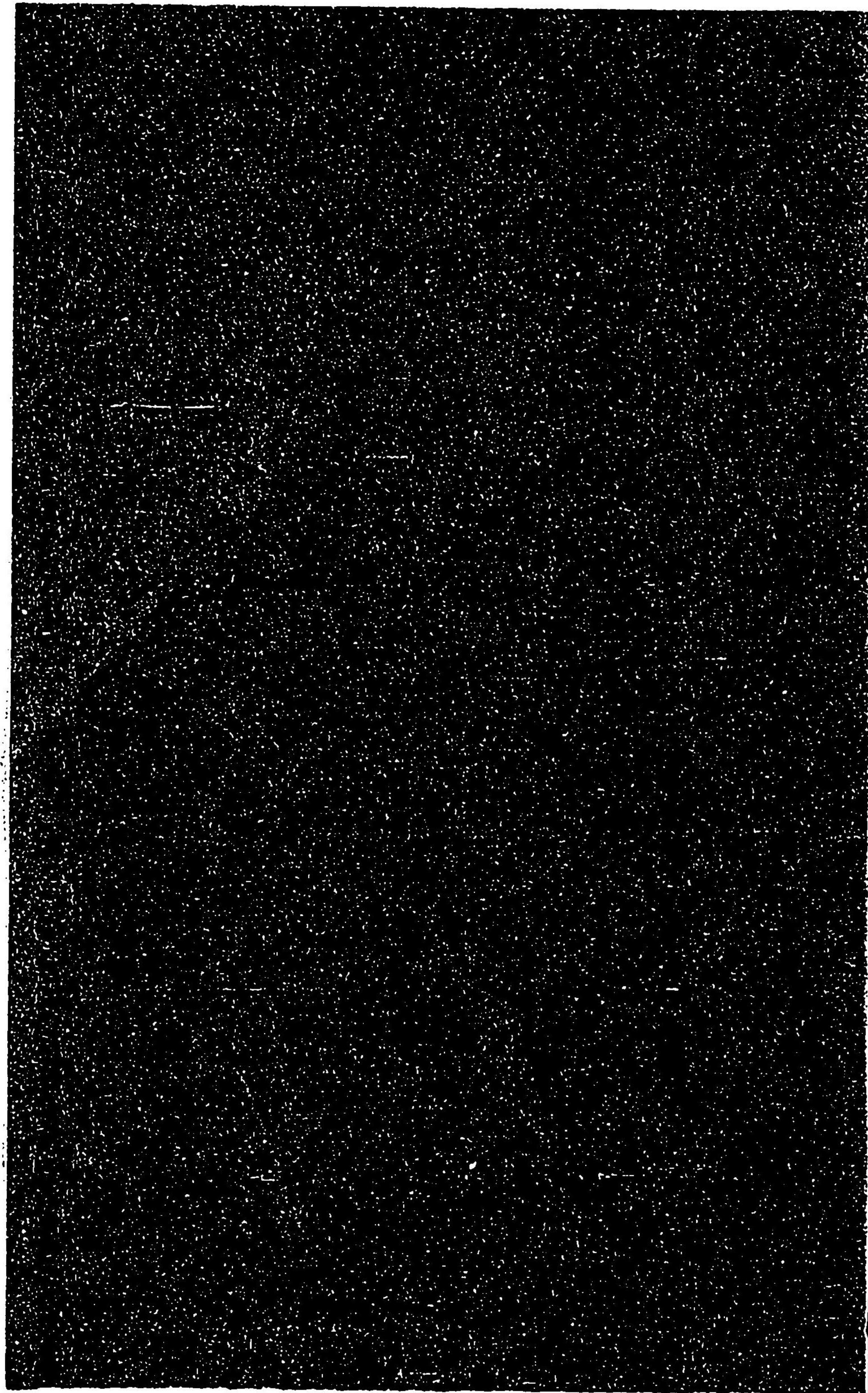
個中の消息 明治三十二年稿

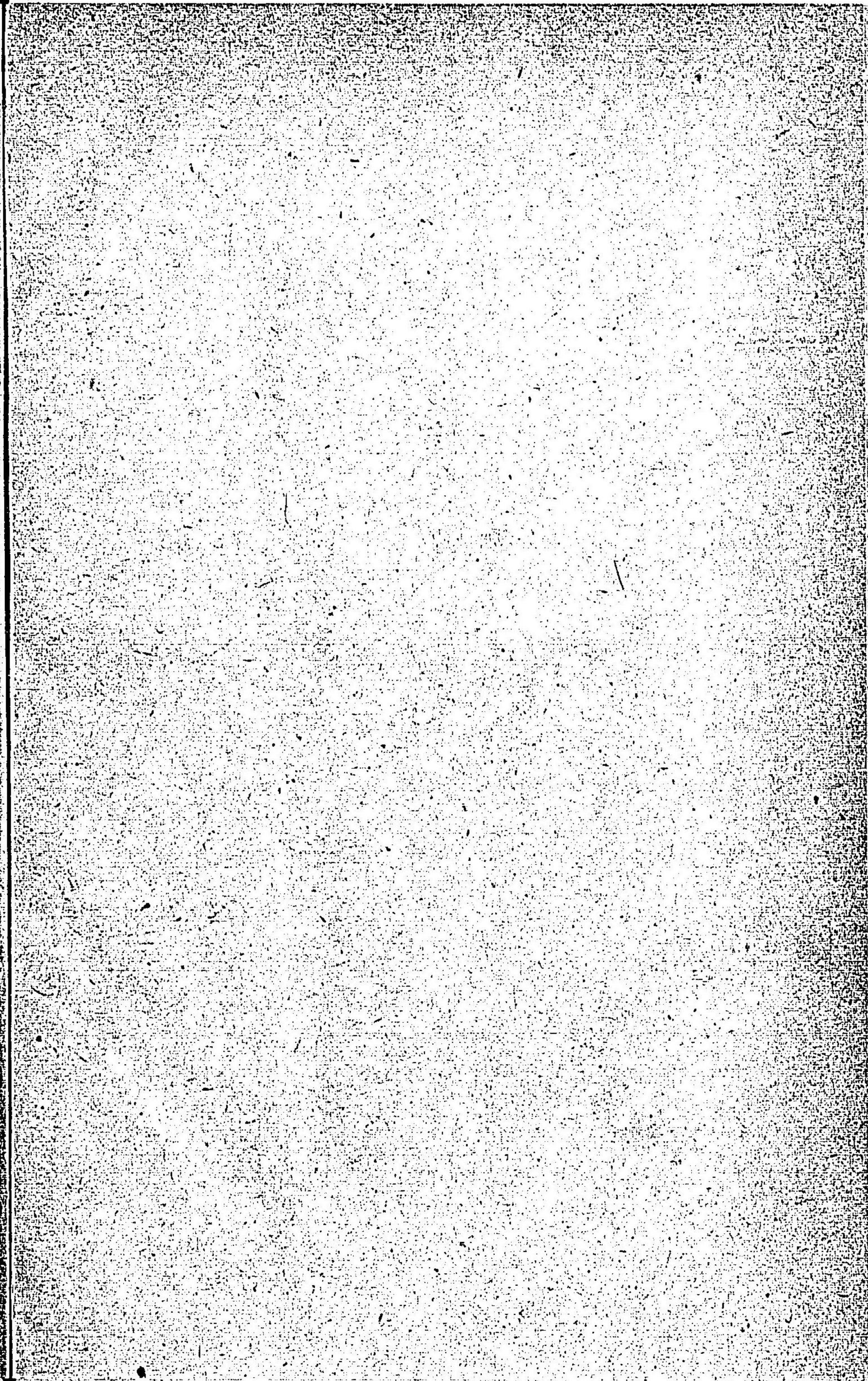
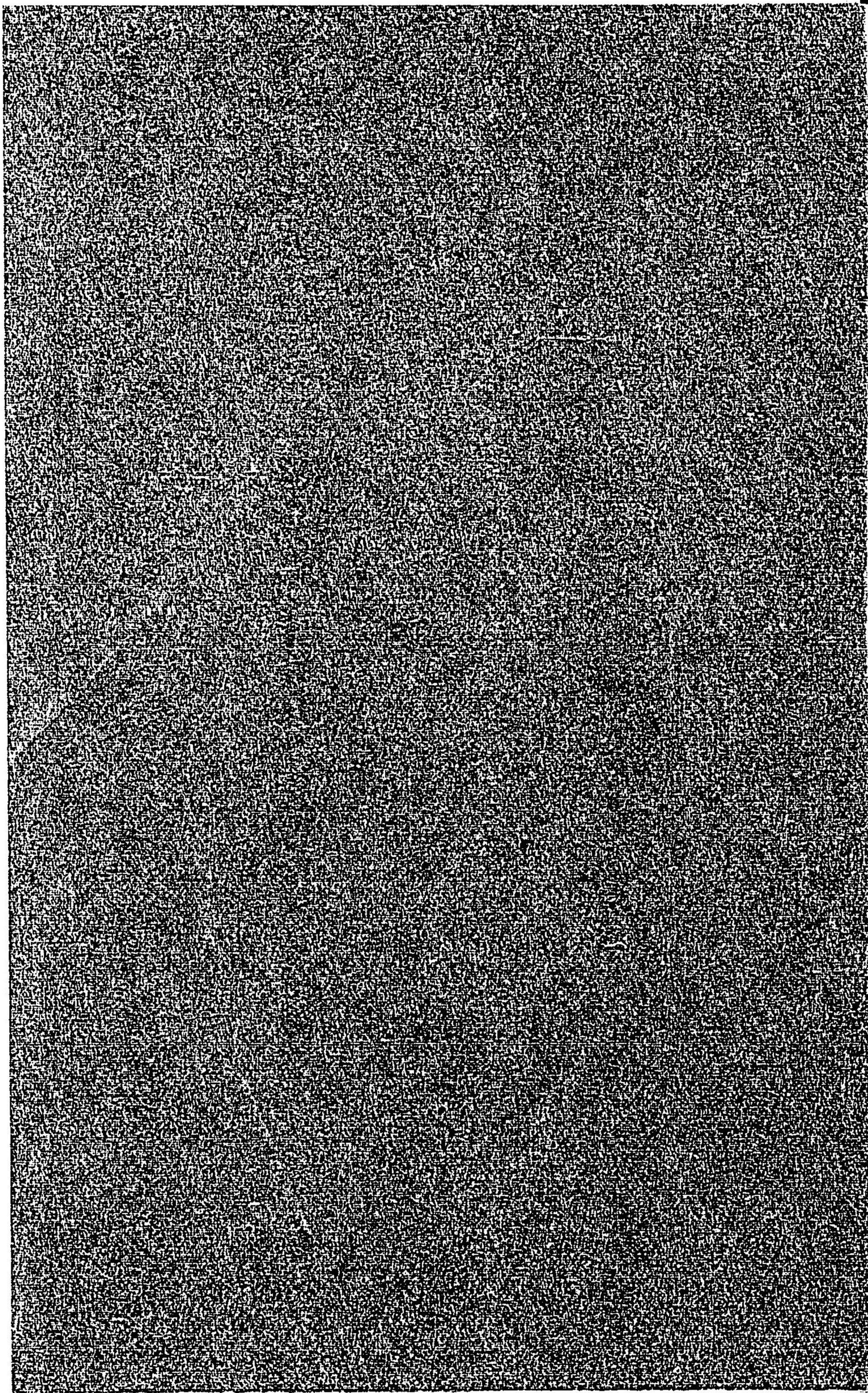
十字架教講話集上 明治三十五年稿

同 中同

同 下 自明治三十七年 至同四十二年稿

「ハムレ」の塔 明治四十二年稿

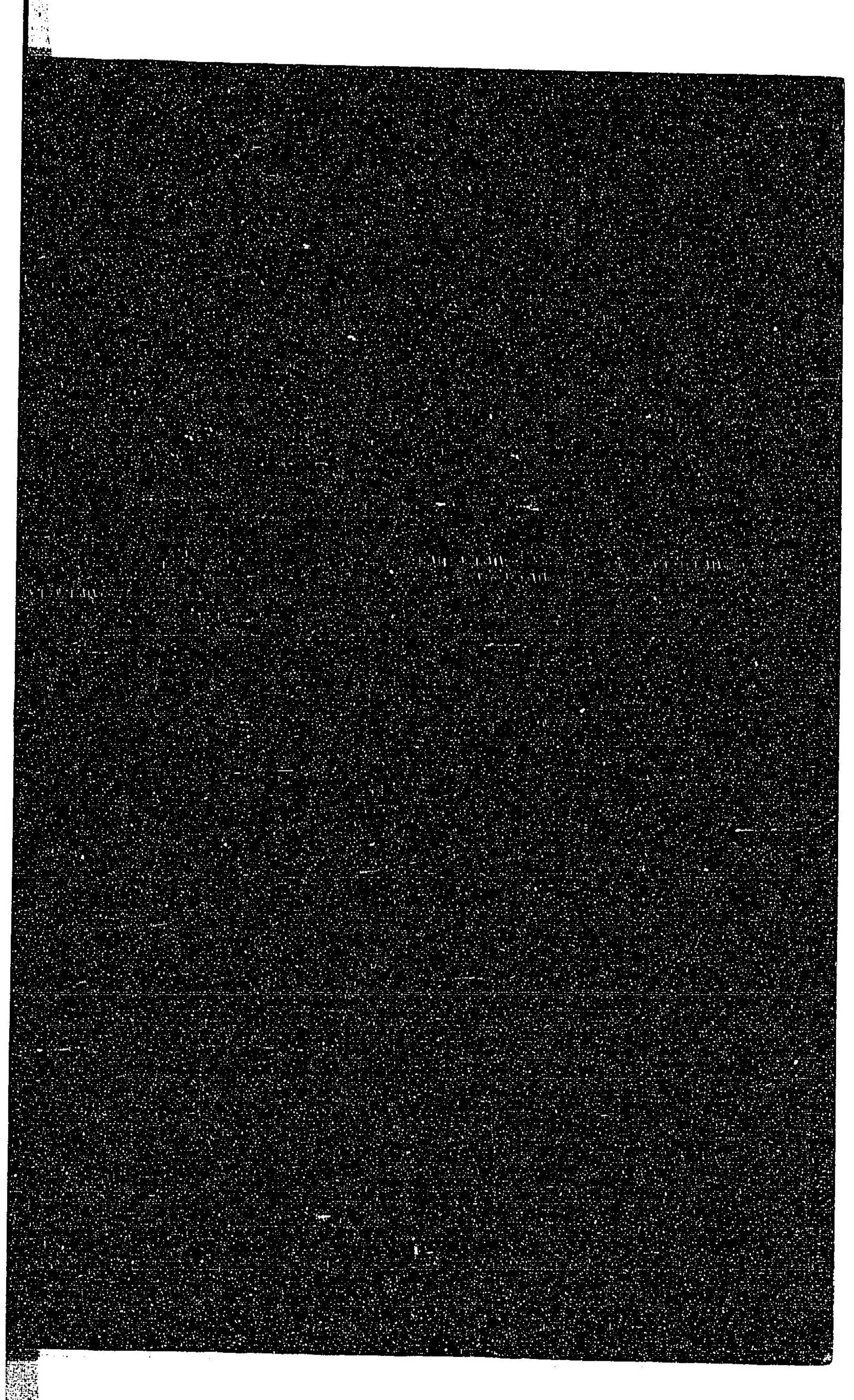






324

251



324  
251  
M

020720-000-7

324-251

十字架教

本川 惟敬/著

1冊

M44

ABI-0540

